

関西地域のオペラ活動 2022

大田 美佐子

1. 概括：2022 年、パンデミック後の復活と展望

2022 年のオペラ界は、パンデミック下で延期となっていた舞台が感染症予防に留意しつつ相次いで復活上演され、明るい展望をもたらした。兵庫県立芸術文化センターは佐渡裕芸術監督プロデュースオペラでプッチーニ《ラ・ボエーム》を、関西二期会は関西初の全曲上演としてロッシーニの《泥棒かささぎ》を上演した。びわ湖ホールは沼尻竜典芸術監督退任の年（その後は桂冠芸術監督）で、伝統として育んできたワーグナー作品《パルジファル》、ヴェルディの《ファルスタッフ》、沼尻竜典の《竹取物語》などを上演した。教育的観点から総合芸術としてのオペラの基盤を豊かにする企画として続けてきた、沼尻芸術監督による指揮者セミナーが聴衆にも公開で実施された。また、大阪交響楽団はオペラ公演を見据えて「オペラ指揮に強みがある布陣」(日本経済新聞 2022 年 5 月 27 日)の3人体制を取ることを発表した。

地域特有の小さなオペラカンパニーの活動も再び活発になった。兵庫県では、オペラ de 神戸によるヴェルディの《椿姫》、芦屋市民オペラのオフエンバック《天国と地獄》など、市民や地域を巻き込んで楽しく啓蒙されるオペラ文化の重要性を再確認した。

セミ・ステージ形式、演奏会形式の可能性

2020 年から続いたパンデミックは、逆説的に「企画の力を温めた」との評価もある(日本経済新聞 2022 年 12 月 23 日)。逆境を機に新たな力を得ることは容易ではないが、小規模のセミ・ステージ形式「ならでは」のオペ

ラ上演も、その試みのひとつであらう。

その筆頭には、セミ・ステージ形式で行われたびわ湖ホールのワーグナー《パルジファル》の上演がある。視覚効果に依存せず、ワーグナーの深みのある管弦楽に刻印された繊細な機微や鐘の音に表象される祝祭性を実直に表現することにより、物語の核心が外面的な闘争ではなく、人間の内面の葛藤と成長を描いていることにあらためて気づかされた。物語を音楽で深く味わうワーグナー作品の醍醐味と言える。

また、大阪音楽大学のザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団は第 61 回定期演奏会で、「コンチェルトペラ」として、関西初演のハイドンのオペラ《無人島》を上演した(10 月 23 日ザ・カレッジ・オペラハウス、イタリア語上演・字幕付 配役詳細は巻末に)。このオペラでは管弦楽伴奏付きの朗唱、いわゆるレチタティーヴォ・アコンパニャートが多い。ウィーン古典派の舞台作品を熟知した指揮の牧村邦彦のメリハリのある音楽作りにリードされ、牧村と長年タッグを組んできた演出の井原広樹は、4 人の登場人物にフォーカスしつつ映像も効果的に使った演出で好評を博した。

神戸では、2021 年から芸術監督を務める鈴木秀美の指揮で、神戸市室内管弦楽団が神戸文化ホール中ホールで、モーツァルトの《コジ・ファン・トゥッテ》を演奏会形式/抜粋で上演した。古典の解釈に定評がある鈴木秀美ならではの、器楽と歌が一体となり躍動感があふれるモーツァルトは、「音楽そのもので、人間の本質をどこまでも多様に掘り下げてゆける」(朝日新聞 2022 年 2 月 10 日 中江早希へのインタビューより)オペラの楽しみ方をあ

らためて提示してくれた。抜粋したうえの演奏会形式とはいえ、オーケストラの奥に高めの台を作り、クラシックの語り部として定評のある朝岡聡のテンポのいい名調子を挟んで、歌手たちの演技も楽しむ工夫がされた。ソリストもフィオルディリージを演じた中江早希、加未徹のグリエルモなど、演技達者で経験豊富、表現豊かな声を持つ歌手が活躍。デスピーナ役には若手の宇佐見朋子が抜擢された。音楽的にもセミ・ステージ形式とは比較的相性が良いとされる古典派の舞台作品で、このような優れた成果があげられた意義は、今後の展開を考える意味でも大きい。

大阪のあいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホールでは、古典的なクラシックだけでなく、日本初演から30年、現代音楽の伝説的な古典ともなったミニマルミュージックの巨匠、フィリップ・グラスのオペラ《浜辺のアインシュタイン》の再演が行われた。アインシュタインの人生を詩的に解釈し、筋の明確な物語というよりはイメージの羅列が社会不安をも暗示する。あえて舞台でのダンスや演技を省き、演奏会形式の抜粋版で14曲が上演され、音楽監督の中川賢一が電子オルガンを演奏しつつ全体をリードした。歌手陣（太田真紀、端山梨奈、八木寿子、林真衣、鹿岡晃紀、松平敬ら）も気が遠くなるような反復の妙技を披露、ヴァイオリンの石上真由子らの超絶技巧といい、その集中力の高い演奏は、「優れたアンサンブルから生まれる奇想天外な響きは、刺激的であり、想像力の翼をはばたかせる。単純な反復は呪術的な興奮を呼び覚まし、陶然とさせられた」（関西音楽新聞 2022年12月号 横原千史評）とも評された。この名演により、令和4年度の文化庁芸術祭大賞（関西参加公演の部）を獲得した。

このように、セミ・ステージ形式や演奏会形式においても意欲的で意義深く、楽しめる上演が評価され、観客にもアピールするよう

になれば、オペラ上演の敷居も低くなり、新旧、大小様々なオペラ上演を楽しむ好機が増えていくと期待される。

地域のオペラの存在感—市民オペラ再考—オペラ de 神戸、堺シティオペラ、芦屋市民オペラなど

2022年に出版された石田麻子著『市民オペラ』（集英社新書）で明らかになってきたように、「市民オペラ」の興隆には、オペラ専用の劇場を持たなかった日本特有の事情が背景にある。関西でもオペラの企画を主催できる劇場は、びわ湖ホールや兵庫県立芸術文化センターなど限定的であり、公民館や公共ホールでは、プロフェッショナルとアマチュアが協働する場を提供している。その協働におけるプロフェッショナルとアマチュアの関わり方やバランスは、それぞれの団体で異なる。多くの場合、公演ではプロの歌手がソリストを担い、アマチュアの市民は合唱や群衆で参加する。市民オペラに共通するのは、その熱気に溢れた協働の現場と会場である。

1月には、神戸にオペラが根付くようにと「神戸のオペラ座」の意で名付けられたプロジェクト「オペラ de 神戸」で、ヴェルディの《椿姫》が上演された。オペラ de 神戸のプロデューサー、カリスマ性のある声楽家、井上和世は神戸文化ホール40周年を迎えた2014年の市民創作オペラで成功を収め、今回も彼女に賛同したプロフェッショナルが舞台を作り（演出は井原広樹、美術プランは増田寿子）、演奏は佐渡裕指揮の兵庫芸術文化センター管弦楽団が担った。ソリストはでヴィオレッタに住吉恵理子、アルフレードに西影星二、油井宏隆のジェルモンともに好演、共演した市民合唱も熱演だった。

堺シティオペラは教育普及活動を通じても積極的に市民に開かれている。2月12日と13日に予定されていたフェニーチェ堺大ホールでの石桁真礼生のオペラ《卒塔婆小

町》(三島由紀夫原作)と大栗裕のオペラ《赤い陣羽織》(木下順二原作)のダブルビルの公演は中止になってしまったが、代替公演が5月には大阪の大槻能楽堂で、6月には京都の金剛能楽堂で上演された。演出は狂言師、茂山千三郎により、能楽の所作や能装束を纏い、指揮は牧村邦彦が担った。代替公演では大阪交響楽団に代わり、2台の電子ピアノと打楽器で上演された。

創設2002年にモーツァルト《魔笛》の上演で始動したという芦屋市民オペラは、第20回の公演オフエンバックの喜歌劇《天国と地獄》を本拠地、芦屋ルナ・ホールで上演した。毎回のように、600席余りのホールが大入り満員の賑わいである。指揮は松下耕や千原英喜などの初演も手がけてきた合唱指揮者としても定評がある西牧潤、演出は兵庫県立ピッコロ劇団のOGでもある辰寿広美。1967年から芦屋を拠点に活動するアマチュアの気骨あるオーケストラ、芦屋交響楽団は、コミカルな演技力で会場を沸かした芸達者のプロの歌手たちと共に熱演を繰り広げた。

2. 2022年に行われたオペラ公演について

2.1. 関西二期会

第94回 オペラ公演としてモーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》が上演された(3月12・13日、兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール、イタリア語上演・字幕付、配役詳細は巻末に)。現代演出でも人気の高いモーツァルト作品だが、「魂を盗まれ、恋の彩を失い、もはや神々しくも純化された白い女性たちの抜け殻」と演出家、高岸未朝がイメージした白いマネキンが舞台上に何十体も並ぶディストピアなイメージ(舞台美術デザイン:松生紘子)が鮮烈。そのうえで、生命を燃やしながらかたく歌うドン・ジョヴァンニの萩原寛明や初々しいドンナ・エルヴィーラの森川華世らの人間の声の世界が対比された。ドン・ジョ

ヴァンニの寓話が酷烈に照射する現代社会へのメッセージに、この作品が持つ今日性をあらためて浮き彫りにした。8月には、第60回大阪国際フェスティバル2022で、全曲上演が関西初演となるロッシーニのオペラ《泥棒かささぎ》が上演された(8月9日、フェスティバルホール、イタリア語上演・字幕付)。ニネット役の老田裕子をはじめ、歌手陣の充実にくわえて、ロッシーニに深い拘りを持つ園田隆一郎の指揮は、「セミアリア然とした音楽作りの絶妙な軽重バランス感」(関西音楽新聞2022年10月号 村田英也評)と称賛され、またレチタティーヴォのフォルテピアノを担当した岡本佐紀子の独創的なセンスも好評だった。11月には、第95回オペラ公演としてヴェルディの《リゴレット》が上演された(11月26・27日、吹田市文化会館メイシアター大ホール、イタリア語上演・字幕付、配役詳細は巻末に)。鈴木恵里奈指揮、関西フィルハーモニー管弦楽団の演奏、太田麻衣子の演出とともに、ジルダ役を演じた周防彩子が「持ち前の美声に加え、音程の正確さ、コロラトゥーラの煌めきなど魅力にあふれ、この上演の白眉」(関西音楽新聞2023年1月号 横原千史評)と称賛された。

2.2. 関西歌劇団

スプリングオペラとしてフンパーディンクの《ヘンゼルとグレーテル》を上演(6月15日、兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール、ドイツ語上演・字幕付)。音楽はコレペティートルの關口康祐のピアノにより、「若手歌手の躍進をベテランが支える」(関西音楽新聞2022年8月号 鳴原真一評)と評価された。また、秋には第102回定期公演で、10代のモーツァルトの歌劇《偽の女庭師》が上演された(9月17・18日、吹田市文化会館メイシアター中ホール、イタリア語上演・字幕付)。ザ・カレッジ・オペラハウスでの関西の初演時にタッグを組んだ指揮の牧村邦彦

と井原広樹の演出で上演。なかでも、エンターテインメント性の観点から、「明朗闊達な演唱で観客を大いに魅了」した(関西音楽新聞 2022 年 11 月号 村田英也評) 市長ドン・アンキーゼ役の清原邦仁の熱演が絶賛された。

2.3. びわ湖ホール

年明けの「オペラへの招待」では、沼尻竜典 びわ湖ホール芸術監督の作曲作品、歌劇《竹取物語》が上演された(1 月 22・23 日、びわ湖ホール大ホール、日本語上演・日本語・英語字幕付、配役詳細は巻末に)。かぐや姫の要求に応えようとする 5 人の求婚者には谷口耕平、市川敏雅ら、びわ湖ホール声楽アンサンブルを中心とした個性派の芸達者が揃った。沼尻指揮のオーケストラと歌のバランスも「繊細な弱音から、ダイナミックな強音までを表出する日本センチュリー交響楽団の演奏が響きを彩る中、言葉が持つ意味が昇華される歌だけに許された力が発揮される」(朝日新聞 2022 年 2 月 3 日 小味渕彦之評) と好評を博した。栗山昌良の原演出にプロジェクト・マッピングなどを駆使してアップデートさせた中村敬一の演出も「再演を重ねて内容も充実し、舞台晴れのする出しものに成長していた」(関西音楽新聞 2022 年 3 月号 嶋原真一評) と評価された。夏のオペラへの招待では、ヴェルディ晩年の傑作ブッファ《ファルスタッフ》が上演された(7 月 15～18 日、びわ湖ホール中ホール、イタリア語上演・字幕付、配役詳細は巻末に)。オペラ初心者若者には安価に、馴染みの薄かった人々にも良質でわかりやすいオペラを届けているこのシリーズは、びわ湖ホール声楽アンサンブルのメンバー、清水徹太郎、市川敏雅らが主要キャストの一角を担う。公演は 4 日連続。指揮はこのシリーズに何度も出演しイタリアものを得意とする園田隆一郎。演出とお話はリッカルド・ムーティに学び、「ヴェルディは無駄な音を一音も書かなかった

と観客に納得させる、譜面に忠実な演奏を心がけた」(読売新聞 2022 年 8 月 22 日 青木さやか) と話す田口道子が担当した。

びわ湖ホールプロデュースオペラでは、新制作のワーグナー《パルジファル》が上演された(3 月 3・6 日、びわ湖ホール大ホール、セミ・ステージ形式、ドイツ語上演・字幕付、配役詳細は巻末に)。コロナ状況下のワーグナー上演としても定着してきたセミ・ステージ形式とはいえ、5 時間半もの上演時間に冗長さを感じさせず、集中力が途切れぬ研ぎ澄まされた音楽と言葉のドラマの展開に魅せられた。両日ともにタイトルロールを演じた福井敬の清々しく成長するパルジファル、複雑な感情を抱えるアムフォルトスの青山貴、「正邪両面に生きる」クンドリを演じた田崎尚美などの歌手陣の充実も素晴らしく、沼尻竜典率いる京都市交響楽団の演奏でこそ、可能な境地であった。

2.4 兵庫県立芸術文化センター

毎夏の佐渡裕芸術監督プロデュースオペラでは、2020 年に予定されていたプッチーニの《ラ・ボエーム》が上演された(7 月 15～18・20・21・23・24 日、兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール、イタリア語上演・字幕付、配役詳細は巻末に)。目の覚めるようなスケールの大きなセットといい、第 2 幕の学生街カルチュ・ラタンのカフェ・ミュモス、大勢の人々と賑わうパリの街の雰囲気精巧に描くダンテ・フェレッティの演出は、彼自身が創り出す舞台美術がオペラの世界観をダイレクトに表現し、まさに豪華絢爛な「オペラ」芸術の復活とその醍醐味を実感させた。歌手陣は海外組と日本組で 4 日ずつ分かれた布陣だが、海外組ではパルピニョールに清原邦仁、日本組ではムゼッタにジョージア出身のソフィア・ムチェドリシュヴィリが加わった。タイトルロールをはじ

め、それぞれのキャラクターが際立つ歌手の熱演も見事。「総勢約 100 名の活気に溢れた大合唱は圧巻で、佐渡裕率いる兵庫芸術文化センター管弦樂團もすこぶる雄弁」(関西音楽新聞2022年9月号 村田英也評)と称賛された。

2013 年から続く日本オペラプロジェクトは、兵庫県立芸術文化センターの主催公演の重要な柱でもある。1952 年に関西で初演された團伊玖磨作曲の一幕のオペラ《夕鶴》(木下順二原作)を、栗辻聡指揮のザ・カレッジ・オペラハウス管弦樂團と岩田達彦の演出で上演した(3月20・21日、兵庫県立芸術文化センター阪急中ホール、4月2日、東大阪市文化創造館 Dream House 大ホール、同館主催、兵庫県・兵庫県立芸術文化センター共催、日本語上演・字幕付、配役詳細は巻末に)。厳選された配役で、つうと与ひょうはダブルキャスト、運ずと惣とは全日共通の布陣。村の子供たちは夙川エンジェルコール。「異類婚姻譚の背理の愛が辿るカタストロフへの道筋」を心理面で深く描いた岩田達彦の演出、つう役の神戸出身のプリマドンナ、老田裕子についても「第一声からこの世のものとは思えぬ異形の妖しさを湛え、この役に対する造り込みの深さをひしひしと感じさせた」(関西音楽新聞 2022 年5月号 村田英也評)と高い評価を得た。

2.5. オペラ de 神戸 ヴェルディ《椿姫》(1月7・8日 神戸文化ホール大ホール、イタリア語上演・字幕付)

【指揮：佐渡裕、演出：井原広樹、プロデューサー：井上和世、美術プラン：増田寿子、ヴィオレッタ：住吉恵理子；並河寿美、アルフレード：西影星二；松本董平、ジェルモン：油井宏隆；伊藤友祐、フローラ：平瀬令子；名島嘉津栄、ガストン子爵：清原邦仁；水口健次、ドビニー侯爵：青木耕平；内藤大、ドゥフォール男爵：下林一也；伊藤正、グランヴィール医師：武久竜也；片桐直樹、アンニーナ：岸畑真由子；宇治田麻由美、ジュ

セッペ：佐藤謙蔵(両日)】

2.6. 第 20 回 芦屋市民オペラ オフフェンバック《天国と地獄》(2月6日 11:30～/16:30～の1日2回公演、芦屋ルナホール、日本語上演)

【指揮：西牧潤、演出：辰寿広美、ジュピター：嶋本晃；大西信太郎、プルート：竹内直紀；水口健次、オルフェ：しまふく羊太；清原邦仁、ユリディス：鈴木貴子；藤田果苗、ジュノン：南出真美；ナムユカ、キューピット：岡山真理子；高木有紀、ダイアナ：十鳥可奈子；岡本真季、ヴィーナス：奥村真比呂；平瀬令子、バッカス：田中崇由希、マーキュリー：山崎覚、ジョン・ステュクス：安川忠之、セロン：辰寿広美、ヨロン：劔持瑞貴、セケン：西垣千賀子、管弦楽：芦屋交響楽団、バレエ：波多野澄子バレエ団、合唱：芦屋市民オペラ合唱団/芦屋少女少女合唱団】

2.7. 神戸市室内管弦楽団定期演奏会 vol.152 モーツァルト《コジ・ファン・トゥッテ》(2月26日 神戸文化ホール中ホール、演奏会形式・抜粋、イタリア語上演・字幕付)

【指揮：鈴木秀美、フィオルディリージ：中江早希、ドラベッラ：染谷熱子、フェルランド：伊原木幸馬、グリエルモ：加来徹、ドン・アルフォンソ：氷見健一郎、デスピーナ：宇佐見朋子、ステーキング：藪川直子、語り：朝岡聡、演奏：神戸市室内管弦楽団】

2.8. 堺シティオペラ《卒塔婆小町》《赤い陣羽織》(卒塔婆小町：作曲 石桁真礼生、原作 三島由紀夫、赤い陣羽織：作曲 大栗裕、原作 木下順二、5月14日 大槻能楽堂、6月12日 金剛能楽堂)

【指揮：牧村邦彦、演出：茂山千三郎、衣装：茂山千三郎・鶴岡雅子、合唱：堺シティオペラ記念合唱団 フィメール、《卒塔婆小町》詩人：福岡勲；伊藤正、老婆：福原寿美枝；並河寿美、小町：東野亜弥子；並河寿美、巡查：

東平聞(両日)、ほか/《赤い陣羽織》おやじ：
中川正崇；松本董平、おかか：西田真由子；
高嶋優羽、代官：池田真己；榊貴志、奥方：
溝越美詩；水野智絵、庄屋：片桐直樹(両日)、
子分：孫勇太；橋本恵史、ほか】

2.9. 関西歌劇団スプリングオペラ ファンパーディング

《ヘンゼルとグレーテル》(6月15日 兵庫県立芸
術文化センター 神戸女学院小ホール、ドイツ語
上演・字幕付)

【ピアノ：關口康祐、演出：高木愛、映像：
久保田テツ、ヘンゼル：仁田依里、グレーテ
ル：木村美穂、魔女：堀口莉絵、ペーター：
井上敏典、ゲルトルート：井岡潤子、露の
精：脇本圭奈子、眠りの精：野尻友美、合唱：
関西歌劇団ヘンゼルとグレーテル ヴォーカ
ルアンサンブル】

2.10. 第60回大阪国際フェスティバル2022 大阪国際

フェスティバル×大阪交響楽団×関西二期会
ロッシーニ《泥棒かきさぎ》(8月9日 フェスティ
バルホール、演奏会形式、イタリア語上演・字
幕付)

【指揮：園田隆一郎、ステージング：奥村啓
吾、ファブリツィオ：晴雅彦、ルチア：福
原寿美枝、ジャンネット：小堀勇介、ニネッ
タ：老田裕子、フェルナンド：青山貴、ゴッ
タルド：伊藤貴之、ピッポ：森季子、イザッ
コ/アントーニオ：清原邦仁、ジョルジョ：
西尾岳史、裁判官：片桐直樹、管弦楽：大阪
交響楽団】

2.11. 関西歌劇団第102回定期公演 モーツァルト《偽

の女庭師》(9月17・18日、吹田市文化会館メイ
シアター中ホール、イタリア語上演・字幕付)

【指揮：牧村邦彦、演出：井原広樹、映像：
増田寿子、照明：原中治美、衣装：下斗米大
輔、舞台監督：青木一雄、音響：平井英一、
制作統括：湯浅契、ドン・アンキーゼ：清原

邦仁(両日)、ヴィオランテ：梨谷桃子；東
里桜、ベルフィオーレ伯爵：近藤勇斗；孫勇
太、アルミンダ：末廣早苗；黒田恵理、ラ
ミーロ：堀口莉絵；北野知子、セルベッタ：
南さゆり；乾彩子、ナルド：伊藤友祐；迎肇
聡(客演)、管弦楽：ザ・カレッジ・オペラ
ハウス管弦楽団、合唱：関西歌劇団合唱部】

2.12. あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックス

ホール アンサンブル・ア・ラ・カルト 65 フィ
リップ・グラス《浜辺のアインシュタイン》(10
月30日 あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェ
ニックスホール、演奏会形式・抜粋版)

【電子オルガン/音楽監督：中川賢一、電子
オルガン：廻由美子、ソプラノ：太田真紀・
端山梨奈、アルト：八木寿子・林真衣、テ
ノール：鹿岡晃紀、バス：松平敬、ヴァイオ
リン：石上真由子、フルート/ピッコロ：若
林かをり、サクソフォン：大石将紀・井上ハ
ルカ、音響：有馬純寿】

2.13. 第31回みつなかオペラ モーツァルト《コジ・

ファン・トゥッテ～恋人たちの学校～》(11月5・
6日 川西市みつなかホール、イタリア語上演・
字幕付)

【指揮：牧村邦彦、演出：井原広樹、合唱指
揮：岩城拓也、装置：アントニオ・マストウ
ロマッティ、美術・映像：増田寿子、照明プ
ラン：原中治美、音響コーディネイター：小
野隆浩、音響：平井英一、衣裳：村上まさあ
き、演出助手：唐谷裕子、舞台監督：青木一
雄、フィオルディリージ：山口安紀子；白石
優子、ドラベッラ：十合翔子；伊藤絵美、グ
リエルモ：迎肇聡；仲田尋一、フェランド：
古屋彰久；中川正崇、デスピーナ：村岡瞳；
西田真由子、ドン・アルフォンゾ：松森治；
西村圭市、管弦楽：ザ・カレッジ・オペラハ
ウス管弦楽団、チェンバロ：梁川夏子、合
唱：みつなかオペラ合唱団】